

政治の世界では、高市政府による抜き打ち解散、そして立憲・公明両党による新党結成と、慌ただしい動きが続いている。これがどこに行き着きのかは予断を許さない。今日はとりあえずそうした生臭い話題から離れて、正月休みに読んだリヒテル関係の本2冊の感想。ブリューノ・モンサンジョン『リヒテル』。(筑摩書房、2000年)。

河島みどり『リヒテルと私』(草思社、2003年)。

いうまでもなく、リヒテルは20世紀を代表する大ピアニストだが、その生涯については、モンサンジョンの著作(原著は1998年刊)があらわれるまではあまりよく知られていない部分が大きかった。モンサンジョンはさまざまな音楽家たちに関する映画を撮ってきた人だが、その彼にリヒテルの伝記作成の依頼があったのが本書誕生のきっかけだったという(1995年)。リヒテル本人は撮影されるのを嫌がっていたが、結局撮ることを受け入れた。これ以来、約2年間、かなり密着した取材がなされたが、それが完成しないうちにリヒテルは死去した(1997年8月)。そこでモンサンジョンはリヒテルとの対話をモニタージュ風にまとめ直して、リヒテルの回想であるかのように読める文章をつくりあげた。もともとは対話だったものを一人称の語りのように書き直したのだから、原文そのものではない。それでも著者によれば、これはリヒテル自身の思いを伝えているはずだという。本来的な意味での回想ではないにもかかわらずそのような外観をとっているという点では、本書はヴォルコフ編の『シオスタコーヴィチの証言』と似たところがある。違うのは、ヴォルコフはその著作を回想そのものと称し、その真正性をめぐって大論争が起きたのに対し、モンサンジョンは手の内を明かしているという点である。ヴォルコフもモンサンジョンのように手の内を明かす書き方をしていたなら、あのような大論争を起こしはしなかったのではないかという気がする。

それはともかく、本書は1960年代末までを扱った前半部(「ありのままのリヒテル」)とそれより後の時期に関する後半部(「音楽をめぐる手帳」)からなっている。後者はリヒテル本人が書いたものの採録であり、これがあるために、モンサンジョンは回想風の文章を書くのをこの時期までにとどめたということのようだ。

「ありのままのリヒテル」にはいろいろなことが書かれているが、なかでも衝撃を呼ぶのは父親の最後をめぐる経緯である(第VI章「暗い一ページ」)。ドイツ人である父親は1941年6月、ドイツ軍がオデッサに侵攻してくる前夜に、ソ連人によって銃殺された。当時オデッサではなくモスクワに住んでいたリヒテルはそのことを知らず、ようやく20年後に知ったという。父が殺された後、母はセルゲイ・コンドラチエフというドイツ人とともにドイツに向かい、彼と結婚した。コンドラチエフはリヒテルと改姓し、自分がピアニストの父の弟だと吹聴した。リヒテルはそうした経緯も知らず、母と再会したのは19年後のことだったという。

これは非常にセンセーショナルな話だが、本書の全体がそうした話で埋められているわけではない。むしろ、大部分は彼の経歴(ほとんど独学でピアノを習得)、恩師であるネイガウス(ブーニンの祖父に当たる)のこと、演奏にまつわるもろもろの思い出、そして他の音楽家たちについての随想等々、いかにもピアニストの回想らしい中身である。ソ連体制下で活躍していたにもかかわらず共産党に入らなかったことに示されるように特異な個性を発揮していたようだが、そのことを殊更に強調する感じの叙述はそれほど多くない。

反体制的というよりも、政治的なことにあまり関心をもたずに過ごしていたように見える。体制との距離でもって人間関係を決めていたわけでないことは、共産党員だったオイストラップを「第一級のヴァイオリニスト」とする一方、異論派になったロストロポーヴィチとはある段階で袂を分かったといった叙述に窺える。

たくさんの方が書かれているなかで、一つ目につくのは、1957年にグレン・グールドがソ連に来たとき、あるリサイタルを聞いたが、あまり感心しなかったという批評が記されている——特に、グールドが繰り返しを省くことには賛成できないという——点である（こういう感想は「ありのままのリヒテル」だけでなく、「音楽をめぐる手帳」にも記されている）。もっとも、吉田秀和はリヒテルがグールドに深い関心を寄せたとして、二人を比較的近い関係で捉えようとしている（「音楽展望：グールド没後 20 年」『朝日新聞』2002 年 11 月 25 日夕刊）。この辺は今後、探求の対象になるかもしれない。

演奏に関して眼を引くのは、昔は暗譜で弾いていたが、1970 年代末までにやめたというくだりである。また、もともと絶対音感を持っていたが、今では音の高さを間違えるようになったとも述べられている。こういうことがプロの演奏家について指摘されるのは珍しいが、リヒテルによればネイガウスやプロコフィエフにもそういうことがあったという。楽譜を見ながら弾くようになったときの事情については、後述の河島みどりが詳しく書いている。

リヒテルという人は、日本との間にかなり強い縁があった。昨年読んだ小野光子『回想 音楽の街 私のモスクワ』（朔北社、2011 年）によれば、声楽家である小野の留学中の恩師がリヒテル夫人のニーナ・ドルリアクだったため、小野はリヒテル夫妻の自宅を頻りに訪問し、二人の生活を詳しく観察する機会があったという。ヤマハが特別の技術者をつけてリヒテルにピアノを提供し、その調律師たちが彼と深い絆を持ったことも知られている。そうした予備知識を持った上で、今回、河島みどり『リヒテルと私』を読んでみた。

河島は 1970 年に初来日したリヒテルの通訳を依頼されたのが彼との最初の出会いで、はじめはうまくいかないのではないかと危惧したが、結果的に信頼と友好関係を持つようになったらしい。重要なのは、彼の日常的世話をする付き人のローテーションに組み込まれたことである。そのため、彼女は 1970 年代後半から、ヨーロッパ各地の旅行に付き添うようになった。付き人はリヒテル夫妻と一緒に旅をして、朝から晩まで行動を共にするのだが、彼女の場合、ホテルのキッチンで日本食をつくって供したり、夜はマッサージをするなど、本当に密着した感じになったようだ。特に眼を引くのは、1974 年の来日時、リヒテルは精神的不安が昂じて、「怖くて弾けない」と言い出したというくだりである。パリの主治医に電話したところ、その医者はわざわざ日本に駆けつけてくれて、「譜面を見て弾くように」とアドヴァイスした。このとき以来、リヒテルは楽譜を置いて（見てではない）演奏するようになったという。河島著には、これ以外にもリヒテルの日常生活と行動スタイルに関する詳しい記述があり、モンサンジョンとあわせ読むことで、リヒテルという人がよりよく分かるようになった気がする。

20260205

総務省の総合通信情報基盤局というところから電話がかかってきた。札幌の NTT ドコモ

で私の名義で携帯が契約されたという。そういうことをした覚えがあるかと聞かれたので、ないと答えると、おそらく個人情報が漏れて、他人が契約したのではないかという。そして、その携帯から大量の迷惑メールが発信されているので、それを防ぐために手を打たねばならないという。警察に届ける必要があるが、地元の警察では連絡がつかず、札幌の警察に連絡する必要があるという。札幌に行く予定があるかと聞かれたので、ないと答えると、「緊急情報ダイヤル」というところに電話すればよいという。その番号を教えてくださいと頼んだら、番号を知らせるわけにはいかないが、このままそこに転送することができるという。どうもこれは話が怪しいと思ったのだが、本当の話なのか詐欺電話なのかの区別がつかず、もし本当なら放置するわけにはいかないので、苦慮しながら、(こちらの個人情報を伝えないよう気をつけつつ)しばらく話を続けた。とにかく「緊急情報ダイヤル」の番号を知らせるわけにはいかず、このままそこに転送するというので、それならこちらで何とか対処するので、転送しないでくれと言って、電話を切った。その後すぐに、総務省の問い合わせ窓口の電話番号を探してかけてみたところ、こちらの説明を聞いた担当者が、それは間違いなく詐欺なので、無視するようにとアドバイスをしてくれた。結局、被害は受けないですんだわけだが、かなり時間がかかったし、万が一本当の話だったら困ると思って大分ヒヤヒヤさせられた。詐欺電話もいろんな種類があるらしいが、これはかなり手の込んだもののようなのだ。油断のならない世の中になったものだ。

20260209

各種の事前予測からして、こういう結果が出ることはそれほど意外でなかったとはいえ、昨日来の選挙結果には溜息ばかりが出てくる。自民の大勝には、はっきりした右傾化の動きと、ふわっとした高市支持とが関与しているだろう。この二つが同じでないということは、前者がすべてでないことを意味するが、後者が自立した動きでない以上、それに期待をかけるわけにもいかない。これから先のことを予測することはできないが、容易ならぬ事態に至ったという気がする。

突飛かもしれないが、ナチスが政権の座に就いたときのドイツ国民の反応のことを考えてみたいという気がする。すべてがあっという間に変わったわけではなく、当面これまでと同じような日常生活が続いた以上、なにがしかの懸念をいだきながらも、「まあ何とかなるだろう」と考えた人も多かっただろう。その後いろんな事件が起きて、事態が深刻さを増してからも、「まだ何とかやっつけていける」という感覚があっただろう。そして、どこかの段階で遂に一線を越えたということなのではないか。今日の日本と世界がそのどの段階にあるのかは、まだ何とも言えない。とりあえずは普通の日常生活が続き、たんたんと生きていくほかないが、それにしても、そこはかたない不安が底にたまっているような気がする。私のような年長世代は決定的破局をみるよりも前に世を去るかもしれないが、子供たちや孫たちの世代がどういう世の中を生きていくことになるのかが気懸かりだ。

とりあえず一つだけ何かを言うておくとしたら、こういう状況の中でも——あるいは、こういう状況の中だからこそなおさら——背筋を伸ばして、しゃんと生きていくこと、そしてそのことを周りの人々にも一つの例として示していくことではないかという気がする。それがどの程度の広がりや効果をもつかは何とも言えない。ただとにかく、後になって後

悔することのないようにするには、それしかないのではないだろうか。

20260215

ここしばらく（衆議院選挙の少し前から選挙後にかけて）、大江健三郎の作品をいくつか読んでいた。実をいうと、私はこれまで大江の文章をあまり読んでこなかった。文学作品は難しくて読みにくそうな気がしたし、社会問題を扱ったエッセイ類は逆に分かりやす過ぎて物足りないという気がしていた。そして、同じ人間がこんなにも違った性格の文章を書くのはどうしてかが分からないと感じていた。それでも、どことなく気になるところがあり、全然読まずに済ますわけにもいかないだろうと思っていた。たまたま他の仕事のあいだのスキマ時間がわりと多めにできたので、それを利用してポツリポツリ読んでみた。読んだのは『われらの時代』と短編集『死者の驕り・飼育』だが、これらを取り上げたのはたまたま手近にあったというだけの理由であり、それ以上の理由があったわけではない。読後感をまとめるのは容易ではない。一つの表面的な特徴としては、性的な話題と暴力が非常に大きな位置を占めているように感じた。私のような高齢者にとっては受けとめにくい主題だが、執筆当時若かった著者にとっては、これを重視することこそが自然だったのかもしれない。性的な話題の描写はうるわしい感じでは全くなく、むしろ自分と相手をおとしめるような書き方があちこちにある。それ以外にも、主要登場人物が尊厳を失い、恥辱にまみれるような個所が少なくない。他方、前向きに理想を掲げる登場人物は、あまり信頼できない人のように描かれている。一言で言って、人間賛歌ではなく、その逆という気がした。その意味で暗いトーンが基調をなすように思われるが、読んでいて「こういうことは案外ありそうだ」と感じさせられるところが多く、リアリティがあって、引き込まれる。あまり後味がよいわけではないが、文学作品としては成功しているのではないかという気がした。

それはよいのだが、社会問題を扱ったエッセイ類との関係はどうなのだろうかという疑問が募る。大江は「進歩的文化人」「戦後民主主義の擁護者」として広く知られている。しかし、今回私の読んだ一連の小説は、そういうイメージとうまく合致しない。何らかの理想を掲げるようなタイプの登場人物は中心的なヒーローではなく、むしろシニカルに描かれている。そして、政治的運動に関与する人たちは種々の迷いや汚点をかかえ、往々にして悲劇的な結果に陥る。もちろん、個々の作品ごとに現実との関わりは多様だが、とにかく戦後民主主義を擁護して「進歩的文化人」を喜ばせるというタイプの作品ではないような気がした。このことをどう考えるべきだろうか。膨大な作品群のうちのほんの一部を読んだだけで何かが言えるわけではない。これから先どれほどの作品を読むことになるかは分からないが、解きたい宿題が残ったような気がした。

20260227

東畑開人『カウンセリングとは何か——変化するということ』（講談社現代新書、2025年）という本を読んだ。

私がこの著者の名前を知ったのは、2019年に朝日新聞社の大佛次郎論壇賞を受賞したと

きのことで、それ以来、彼が新聞紙上に書く文章をわりと熱心に読んできた。それは彼がカウンセリングに際してどういう問題にぶつかったか、それについてどう考えるかを分かりやすく書いた文章だが、その都度「なるほど、そうだったのか」と感じさせる啓発的な文章だった。今回読んだ新書本は「新書大賞 2026」で第 1 位となり、相当な話題作のようだ（私の手許にあるのは 2026 年 2 月の刊行で、早くも第 7 刷となっている）。読む前の漠然たる予感として、新聞などに掲載された小文類を集大成したものかと思っていたが、そうではなくて、「カウンセリングとは何か」を体系的に論じる原論的な書物だった。これまでに私の読んできた小文類が実践編であるのに対し、こちらは理論編という関係に立つようだ。豊富で具体的な事例——但し、個人情報特定されないよう注意し、複数の事例を混ぜ合わせて再構成されているという——を紹介し、カウンセリングがどういう問題にぶつかり、どのように対応しているのかが論じられている。その内容はあまりにも豊富であり、それをいちいちここで書く余裕はない。一つだけ気になるのは、カウンセリングが人と人との実存的な接触であるように見える一方、時間を明確に区切り、一回ごとに一定の報酬——支払う側からすれば決して安いとは言えない——を伴うビジネスとしての側面を持つことをどう考えたらよいかという問題である。しかし、この点は、どう考えたらよいか分からないので、とりあえず未解決のまま放置するほかない。それを別にすれば、学ぶところの多い良書というのが全体としての感想である。

本書自体からは離れるが、こういう本を読んでいると、私自身のこれまでの経験を思い出させられる。私はこれまでの長い人生のあいだに、人生が滅茶苦茶になってしまうのではないかと感じさせる危機に直面したことが何度かある。それでも、運に恵まれて、何とか無事に生きてきた。自分自身とは別に、身近な人たちが本当に破滅するのではないかと感じられる状況にあるのを見て、どうしたらよいか分からないままにジタバタしたことも何度かある。「いのちの電話」に電話をかけてみたところ、相談員は穏やかな口調でアドヴァイスをしてくれるのかと思いきや、涙声になって「あなたの話を聞いていると、私自身が辛く、悲しくなってきました」と言われて驚いたこともある（ひょっとしたら、これもカウンセリングの一つの手法なのだろうか？）。そうした経験を思い出しながら本書を読むと、私は「カウンセリングとは何か」が全く分からないままに、素人流のカウンセリングもどきをやってきたように思う。それがどこまで適切だったのかは分からない。私自身にせよ身近な知人にせよ、破滅的危機を何とか乗り切った（ように見える）のは私のカウンセリングもどきがマグレ当たりしたのか、それとも単なる偶然の幸運その他の要因によるのかも分からない。そういうことを考えていると、カウンセリングとは何かますます分からなくなってくる。本書は深い内容を持ち、説得力も高い書だが、それでも「カウンセリングとは何か」はどこまでも謎として残るような気がする。

20260303

一昨日の日曜日、飯田文雄氏を代表とする科研費の研究会が開かれた。対面とオンラインのハイブリッドだったが、私はオンラインで参加した。この日の研究会は若手研究者による現在進行中の研究の中間報告が 2 本という構成。

先ず、伊崎直志氏による「イギリス労働党における「危機」理解の競合——「統治不能」

論争から近代化構想へ」という報告。1970年代を出発点として、労働党在野の時期（1979-90年はサッチャー政権）に同党の敗北がどのように受けとめられたかを検討し、ブレア政権期（1997-2007年）に至る流れを分析するもの。その際、重要なのは、政党の変容は選挙での敗北という外的環境変化から直接もたらされるものではなく、その解釈を経ていることだという点が強調された。選挙での敗北という外部ショックは変化にとって十分条件ではなく、解釈の競合が媒介項だという。対象となる時期に私はイギリス政治は専門でないながら、日々の政治ニュースをチラチラと見ていたので、懐かしい感覚をいただいたが、政治学的分析をしていたわけではないので、報告と討論をひたすら拝聴するにとどまった。参加者たちの中には、ヨーロッパ政治に通じた政治学者が多数含まれたので、この報告をどのように発展させるべきかに関する建設的な意見が多数出され、活発な討論となった。**governability** を統治能力と訳すことの問題性を含めて、いろんな観点が提示された。こういう討論の機会は若手研究者にとって有益な機会となるだろうと感じた。

続いて、百瀬圭吾氏による「来日外国人支援活動の黎明——インドシナ難民支援を通じての日本の NGO の萌芽」という報告。「アジアの中の日本」という視座を出発点に、最初のニューカマーとしてのインドシナ難民（いわゆるボートピープル）がどのように支援されたかを論じるもの。相馬雪香（尾崎行雄の娘）の役割が特に重視され、市民育成機能の活性化という観点が提出された。私はこの報告の意義がどこにあるのかが最初のうちよく呑み込めなかったが、質疑応答の中で、報告者が今回取り上げた 1970年代は黎明期であり、その後、模索期（80年代）を経て展開期（21世紀）に進むという説明をしたのを聞いて、長期的展望がはっきりしてきた。その上での疑問は、黎明期が模索期、展開期にどうつながるのか、そこには連続性があるのか、それともむしろ大きな変化があるのかという点である。私がこの点について質問したところ、報告者は今後の課題としたいと答えてくれた。他の討論参加者たちからも、インドシナ難民支援の政治的意味、あまり難民を受け入れない日本がインドシナ難民を特例的に受け入れたことの意味などが問われた。2つの報告はいずれも若手による荒削りのものであり、古参の政治学者たちから種々の批判的コメントが出されたが、こうした討論を通して研究が練り上げられていくのだろうと期待される。

20260324

数日前、東京都立八王子霊園で、義母の無宗教の納骨をしてきた。昨年10月の逝去以来、葬儀や各種の込み入った手続きを慌ただしく片付けてきたが、これで大半の片がついたことになる。都立霊園は管理料が安いので、裕福でない人たちが主に入るものと思っていたが、わが家の墓のすぐそばに、心臓外科医の開拓者として有名な榊原仟の墓があったので、やや意外な気がした。昼頃に納骨を済ませて、高尾駅の近くにある予約済みのレストランに向かった。駅から徒歩2分ということだったので、ごく近いと思っていたら、驚いたことに高尾駅の北口から南口へとまっすぐ突っ切ることができず、レストランから相当離れたところにある踏み切りを通らないと南側に出られないので、ものすごい大回りをして、老人の足では2分どころか20分近くかかってしまった。駅の北側と南側をまっすぐ突っ切ることができないのはどうしたことかと呆れた。ようやくたどり着いたレストランは、

小規模だが、味はなかなかよかった。長女夫婦、次女夫婦、5人の孫たちと、一族郎党がうちそろい、テーブルの端に妻の両親の遺影を置いて、みんなで献杯してから、ゆっくりとおしゃべりしながら食事をするのができた。妻は遺骨を部屋から出すときに、いよいよ永遠の別居かと思い、胸が詰まったとのこと。それと、墓に供えた立派な百合の花を見て、義母がむかし外国人牧師の経営する幼稚園で習った「麗しの白百合」という賛美歌をよく歌って、幼い妻に聞かせたことを思いだし、苦勞の多かった義母の人生の幕を閉じさせたとのこと。私としては、義母によって苦勞を多く味わった妻にはこれから自分の人生を歩んでほしいと強く願った。

20260330

聴濤弘『ソ連共産党とは何だったのか——日ソ両党関係史からの視点』（かもがわ出版、2026年）という本を読んだ。

聴濤という人は日本共産党の国際部長や政策委員長を務め、2025年に90歳で逝去した（本書は遺著）。「はじめに」によれば、著者は1960年9月の京大の経済学部在籍時に、必要な単位はすべて取り、もうすぐ卒業というときに党中央からの使者が来て、直ちに中退届を出し、モスクワに5年間留学せよという指令を受けたという。何とも強引な指令だが、党の決定には無条件に従うのが党員の義務と考えた著者はその通りにしたという。後に宮本顕治が説明したところによれば、自主独立路線を貫くには自前のロシア語通訳が必要であり、それというのも、それまでの日ソ両党の会談の通訳はソ連人が当たっており、それがあまり信頼できないからだということだった。

本書には長期にわたる歴史のいろいろな局面に関する記述があるが、その中にはわりと当たっているものもあれば、首をかしげる個所もある。また、新しい指摘だと感じる箇所と並んで、とうの昔に広く知られていた個所もある。そういう雑多な叙述を一つ一つ検討することにあまり意味はないと感じる。全体として日ソ両共産党の考え方の違いが詳しく述べられ、ソ連側が間違っていて、日本側が正しいという観点が貫かれているが、ところどころでどちらの党についても内部の違いが明らかにされているのは興味深い点である。宮本顕治は概して肯定的に評価されているが、稀に著者と見解を異にしたことが触れられている。

長期にわたる歴史の中で、最も興味を引くのはゴルバチョフ期である（第14章）。著者によれば、1986年8月の不破哲三・ゴルバチョフ会談は成功し、両党の関係は改善した。ところが、その後にゴルバチョフは変わり、1988年5月の不破・ゴルバチョフ会談は破綻した。その背景にあったのは、1987年11月の革命70周年行事にソ連が日本共産党だけでなく日本社会党も招待したことにあった。この時期のゴルバチョフは社会民主主義に接近しつつあり、（日本共産党の眼からすれば）社会党美化に傾いていた。不破・ゴルバチョフ会談で不破が発言を終えると、ゴルバチョフは顔を真っ赤にして、もうあなたの話は聞きたくない、荷物をまとめて東京に帰ってくれ、と言った。これはゴルバチョフの短気さを示していると著者は書いている。ゴルバチョフがときとして短気な性格を露わにしたということは他の人の回想にもあり、この場面もその例ということかもしれない。他面、日本共産党からすれば、せつかく関係が改善されつつあるのにソ連党が社会党を厚遇

するのが我慢できないということだったようにも思える。ペレストロイカ初期には接近しつつあった両共産党も、ペレストロイカ後期にゴルバチョフが社会民主主義に近づく中で、これ以上の接近は不可能になったように見える。

全体として、本書はそれほど興味深い本というわけではないが、特定の関心をもつ読者にはいくつかの点で面白い情報を提供する本だと感じる。

(追記) 聴濤は独立系新左翼の村岡到にも一定の関心を示したようで、村岡の組織したシンポジウムに顔を出したとのこと。村岡編『歴史の教訓と社会主義』(ロゴス、2012年)、あとがき、282頁)。